令和3年度　ともに学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道

生涯にわたる学びのケイカクについて考える「知的障がいのない医療的ケア児に対する支援・指導計画・大学進学への支援」

1

２０２２年２月５日

北海道北見北斗高等学校　教諭　藤森美佐子

自己紹介

藤森美佐子

・平成11年より　北海道紋別養護学校勤務

・平成16年より　北海道紋別養護学校きたみ学園分校
（現：北見支援学校）勤務

・平成26年より　北見市立北中学校勤務

・平成29年より　北海道北見北斗高等学校勤務

2

令和3年度　ともに学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道

「生涯にわたる学びのケイカクについて考える」

１　事例生徒について（高校時）

２　ケイカクをどのように作成したか

３　指導・支援の実際

３　４　事例生徒の現在

令和3年度　ともに学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道

１　事例生徒について

【事例K】
（１）平成14年生まれ
現在大学2年
（２）病名：脊髄性筋萎縮症Ⅱ型
症状：徐々に筋力が衰えていく
その他の診断：四肢体幹機能障害
高度側彎
慢性呼吸不全
手帳：身体障害者手帳1種1級
（両下肢・両上肢の機能の著しい障害）

4

令和3年度　ともに学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道

１　事例生徒について

【高校時の障がいの状態】

ア　食事：摂食支援が必要。横臥位の状態で摂食することが望ましい。
イ　排泄：おむつを使用。全介助が必要である。昼休みにおむつを交換。
ウ　運動機能：自立での座位はできない。右手の一部、左足の一部でわずかに随意運動ができる。
エ　感覚機能：感覚は通常発達をしているため、体を伸ばしたい、足を動かしたいなどの感覚を有している。そのため、授業中に体位変換を要求することがある。
オ　筆記：短時間（5分程度）自筆可能。筆圧が弱いため、１０Bの鉛筆を使用。
　鉛筆の持ち方、筆記台の向き、紙の位置などの調整が必要。

5

２　ケイカクをどのように作成したか

出会いとかかわり

Kさん	藤森	関係性
市内小学校卒業 （特別支援学級）	北見支援学校勤務	-
中学入学 （特別支援学級）	北見市立○中学校へ転勤	中1,中２はCo. 中３は担任
高校入学 （普通学級：通級）	北見北斗高校へ転勤	高１　通級による指導担当教諭 高２　Co.　HR副担 高３　Co.　HR副担

6

令和3年度　ともに学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道

２　ケイカクをどのように作成したか

（１）個別の教育支援計画

（様式3）

個別の教育支援計画

氏　名	[redacted]	性別	男	学校名	[redacted]~~中学校~~　北見北斗高校
作成者	母、[redacted]（－H26）藤森美佐子（H27－）			作成日	平成26年5月16日　(H28．5修正) (H29．5修正)

● 本人・保護者の希望

	現　在　の　希　望	将　来　の　希　望
本　人	・健康に気を付け学校に登校できることを目標にしたい。(H26,5　中1) ・無理のない範囲で授業に参加していきたい （H27,5　中2） ・身体のハンディはあるが、できるだけ友達と同じ活動をしたい。(H28,5　中3) ・クラスのみんなと同じ活動がしたい。 （H29,5 高1）	・中学校をみんなと一緒に卒業することを目標としている。(中1、中2年) ・普通高校(北見北斗高校)に進学したい。（中3年） ・大学に進学したい。(高1年)
	・周囲の仲間と協力しながら楽しく学校生活を過ごしてほしい。 ・自分のできることを努力してほしい。 ・普通のこと同じく接してほしい。(中学校)	・普通高校への進学も考えていきたい。(中学校)

7

（２）個別の指導計画

生徒名	[redacted]		作成者	通級担当　藤森美佐子
学校名	北海道 北見北斗高等学校	学年・組	[redacted]年[redacted]組	担　任	奈良　孝伸

個別の指導計画（前期）　平成２９年５月１２日作成

通　級　終　了　目　標　（通級終了の時期２年後）
・生活行動全般、言語、運動、情緒、行動等の面で、特に配慮を要する様々な状態を改善・克服し、自立的な生活ができるようにする。 ・コミュニケーション手段として、ＩＣＴ機器等を適切に選択・活用することができる。（コミュニケーション） ・可動域の保持や電動車いすでの自力移動するための筋力を維持できるように動作訓練や筋力維持の活動を行う。（身体の動き）

年　間　目　標
○音声入力、視線入力の方法を理解し、操作に慣れることができる。 ○自立的な社会生活を営めるように、様々な人と適切なコミュニケーションをとることができるようになる。

	通級における指導①	通級における指導②	在籍学級における指導
前期目標	○音声入力、視線入力の方法を理解し、操作することができる。 ○タブレットを操作し、教科書や単語帳を閲覧する方法を知る。	○場面をフィードバックしながら、適切なコミュニケーション行動を理解する。	○情報と社会の時間を中心にＰＣ操作の基本について理解を深める。 ○様々な人と自分からコミュニケーション発信できるようになる。
指導内	○「社会と情報」の教科の時間や学級活動における学級日誌作成など、学校生活や教科学習と結びつ	○生徒会活動で他クラスや他学年とかかわることが増えることから、その関わり方や心構えを事前に	○エクセル、ワード、パワーポイントの操作についての知識を教科学習を通して理解する

8

（3）どのように指導計画を作成したか

①ニーズを踏まえた上で本人に必要な力を考える
（本人、保護者、通級担当）

②高校という環境で可能なこと不可能こと調整で可能になることの確認 （通級担当、HR担任）

③入学後の生徒の実態把握（行動観察）

④個別の教育支援計画　　中学からのものを修正（通級担当→本人）

⑤個別の指導計画　　自立活動の内容を中心に新たに作成（通級担当→本人）

9

3　指導・支援の実際

（1）通級による指導（自立活動）の取り組み

目標①
大学の講義や課題に対応できるレベルにまで視線入力等の技能を高める。

目標②
適切なコミュニケーション行動を選択し、自己の要求や気持ちを言語で表現し、受け身ではなく主体的にマネジメントする

10

代筆支援①

11

代筆支援②

12

（２）自立活動の学習内容
①PC入力の練習（音声入力）

14

視線入力装置（意思伝達装置）

- Eye Tracker Tobii 4c gaming peripheral
- Tobii社は視線追跡や眼球運動の解析を専門に行うスウェーデンの会社。

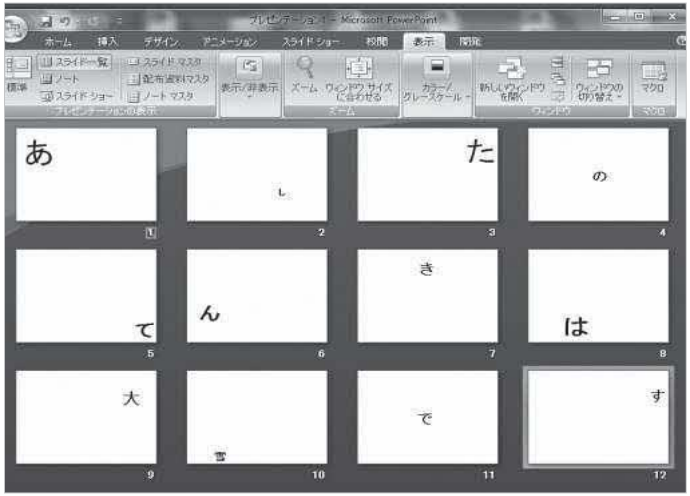
- 重度障害者のコミュニケーション支援技術の研究をしている島根大学　伊藤史人氏が情報提供および練習用のゲームアプリを開発している。　「ポランの広場」

（２）自立活動の学習内容
②PC入力の練習（視線入力）

（２）自立活動の学習内容
②PC入力の練習（視線入力）

17

（２）自立活動の学習内容
②PC入力の練習（視線入力）



18

（２）自立活動の学習内容
②PC入力の練習（視線入力）

19

（２）自立活動の学習内容
③自己マネジメント

20

（２）自立活動の学習内容
③自己マネジメント

21

4　事例生徒の現在

22

4　事例生徒の現在

23

4　事例生徒の現在

24

指導計画作成における課題

○中学校までは各地域の様式で個別の教育支援計画が作られていることが多い。

○目標設定の難しさ
対象生徒にとって目標や指導内容が適切か、本人のニーズとのバランスなど日常的に複数の視点で評価していかなければならないが、それが難しい。

○長期的展望の難しさ
特別支援の生徒の担当者は、単年度で変わってしまうことが多い。

25

さんの大学進学実現を支えた制度

○特別支援教育スーパーバイザー派遣

○「高等学校における特別支援推進のための拠点校事業」

○「高等学校における特別支援教育支援員配置事業」による支援員の配置

○高等学校における通級による指導の制度化

○「特別支援教育パートナー・ティーチャー派遣事業」

○「重度訪問介護利用者の大学等の修学支援」

26

以上でおわります。

詳しくは平成29年度高等学校における特別支援教育推進のための拠点校整備事業　研究開発報告書にまとめています。

27

第４分科会
生涯にわたる学びのケイカクを考える

北海道札幌あいの里高等支援学校
教諭　解　良　和　人

学校教育目標・校訓

学校教育目標

- Go for your dream『夢のために、ベストを尽くす』
  ～今の自分を超え、より高みをめざそう～

具体的目標

- 学ぶ楽しさを体感し、自ら課題を見つけ、考え、行動し、努力し続ける生徒を育てる
- 個性・能力を生かし、他者と協力しながら、北海道の未来を創造し続けることのできる生徒を育てる

未来

・自分のよさや個性を理解するとともに、それに基づいた目標を持ち、その達成に向けて全力で取り組もうとする態度・姿勢、そして共生社会に相応しいシチズンシップを育む。

チャレンジ

・将来の夢や希望を膨らませ、よりよい社会生活、進路決定など自身のQOL向上のために自己理解を進め、自ら課題を見出し、その課題の解決に向けて、取り組むために必要な資質・能力を養う。

感謝

・様々な場面において、他者のよさや感情を共感的に理解しようとする姿勢を涵養する。さらに、社会に貢献しようとする意欲や他者の好意に感謝する気持ちを培う。

学校の概要　平成28年４月に開校しました

住所
- 札幌市北区あいの里４条７丁目１-１

寄宿舎
- 無

通学方法
- JR、バスなど
- 地下鉄麻生駅からスクール便バスを運行

生徒数（令和３年６月現在）
- 170名

職員数（令和３年６月現在）
- 91名

定員（令和３年度）
- １学級８名　（普通科３学級・職業学科５学級）

令和２年度学校祭

令和元年度　あいサークル

本校非公式キャラクター　アイネ

設置学科　５つの職業学科と普通科を設置しています

生産技術科

木工製品やセラミック製品の製作

環境・流通サポート科

清掃などの環境整備
書類の丁合、製本作業など

被服デザイン科

手芸、織物、染色など

食品デザイン科

生活用品、服飾製品の製作
パンや菓子の製造など

福祉サービス科

介護、清掃、調理の家事援助
接客など

普通科

各教科で得た知識・技能を生かし
「総合的な探究の時間」を通して
深める

個別の教育支援計画

◇基礎シート　（様式１）

本人	ふりがな	性別	男　・　女
	氏　名	生年月日	平成　年　月　日
	療育手帳の有無	有（　年　月交付／次回更新　年　月）・無	
	身障手帳の有無	有（　年　月交付／次回更新　年　月）・無	
	その他の手帳		
	住　所	〒	
保護者	保護者氏名	ふりがな　続柄（　）	
	住　所 ＊本人の住所と異なる場合のみ記入してください	〒	
	電話番号（自宅）		
	（携帯）	父・母・その他（　）	
	（携帯）	父・母・その他（　）	
	緊急連絡先①	自宅・携帯（　）・その他（　）	
	緊急連絡先②	自宅・携帯（　）・その他（　）	

家族構成（令和３年４月１日現在の状況を記入してください）

氏　名	続柄	年齢	勤務先（学生の場合は学校名と学年）	
ふりがな				同居・別居
ふりがな				同居・別居
ふりがな				同居・別居
ふりがな				同居・別居
ふりがな				同居・別居
ふりがな				同居・別居

その他、近郊に在住する祖父母・親戚などがおりましたら記入ください。

ふりがな			
ふりがな			

◇学校生活上、配慮などが必要な事項

健康面	
日常生活	
身体機能	
心理面	
コミュニケーション	
対人関係	
その他	

◇本人・保護者の希望

	高校在学時の希望	高校卒業後の希望
本人		
保護者		

個別の指導計画

Ⅰ　個別の指導計画　　0　　0

１　個別の教育支援計画における長期目標について

入学時の願い	生徒の願い	
	保護者の願い	
長期目標（卒業時の目標）		
長期目標についての評価	1学年	
	2学年	
	3学年	

２　自立活動

1年次

生徒の状況	
目　標	1年
手立て	
評　価	
前　期	後　期

Ⅱ　学習の様子

	観点	目　標	学習した内容	評　価	備考
国語					
社会					
数学					
理科					
音楽					
美術					
保健体育					
職業					

個別の移行支援計画

個別の移行支援計画

（平成　　年　　月　　日 記入者：北海道札幌あいの里高等支援学校　担任　　）

ふりがな 氏　名		性別		生年月日	平成　　年　　月　　日生

項目	本人の希望（卒業後なりたい自分）	今後の課題
【生活面】		
【対人面】		
【作業態度面】		
【作業能力面】		
【その他】 様子など		

具体的支援

関係者	支援者・支援機関			支援内容
□	日常生活	場所		
		連絡先		
		担当者		
□	出身学校	場所		・全般的な相談窓口を行う。 ・卒後支援の訪問、卒後関係通信の配付を行う。 ・関係機関との情報交換を行う。
		連絡先		
		担当者		
□	進路先	場所		
		連絡先		
		担当者		
□	相談機関	場所		・仕事や生活の悩みなどの相談などを聞いてもらう。 ・障害基礎年金申請時の支援をしてもらう。
		連絡先		
		担当者		
□	医療機関	場所		
		連絡先		
		担当者		
□		場所		
		連絡先		
		担当者		

備　考

上記の支援計画に同意します

年　　月　　日　　本人署名（自筆）

令和３年度　共に学び、生きる共生社会コンファレンス　　北海道

第４分科会
「生涯にわたる学びのケイカクについて考える」

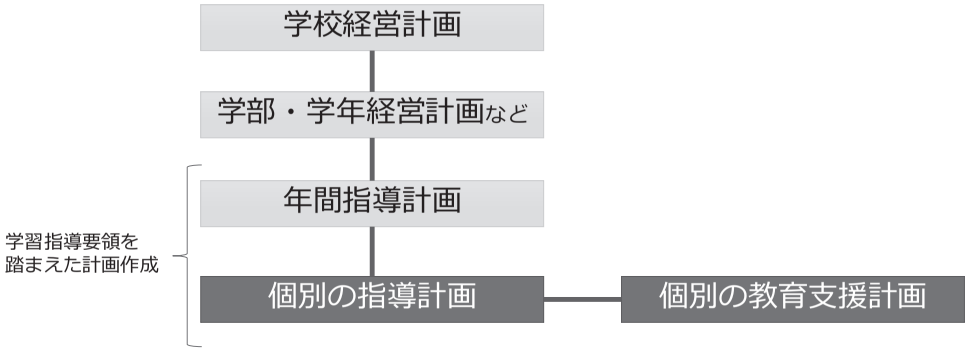
北海道教育庁学校教育局特別支援教育課
特別支援教育指導係長　津川　周一

特別支援教育とは？

特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。

「特別支援教育の推進について（通知）」（平成　年）文部科学省

特別支援学校・特別支援学級の「ケイカク」

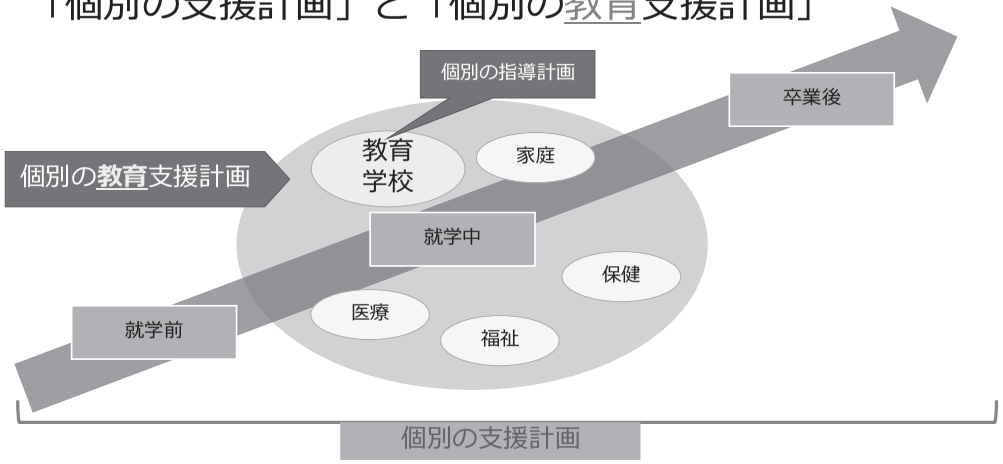


「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」

個別の指導計画	個別の教育支援計画
○　個々の児童生徒の実態に応じて適切な指導を行うために各学校で作成しなければならないもの ○　学習指導要領の内容を具体化し、障がいのある幼児及び児童生徒一人一人の指導目標、指導内容及び指導方法を明確にして、きめ細やかに指導するために作成するもの	○　障がいのある児童生徒一人一人に必要とされる教育的ニーズを正確に把握し、長期的な視点で乳幼児期から学校卒業後までを通じて、一貫した的確な支援を行うことを目的に作成するもの

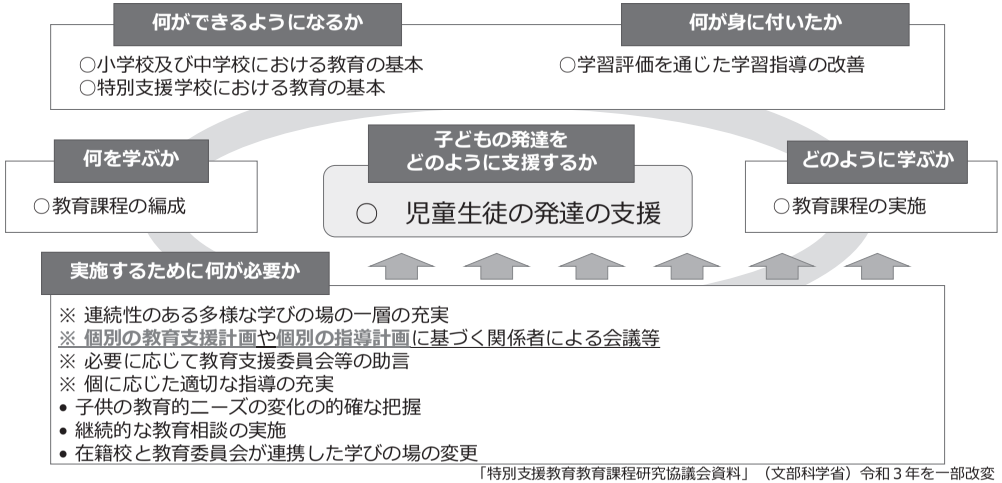
「特別支援学校学習指導要領解説　総則編（小学部・中学部）」 文部科学省）平成　年３月より抜粋

「個別の支援計画」と「個別の教育支援計画」



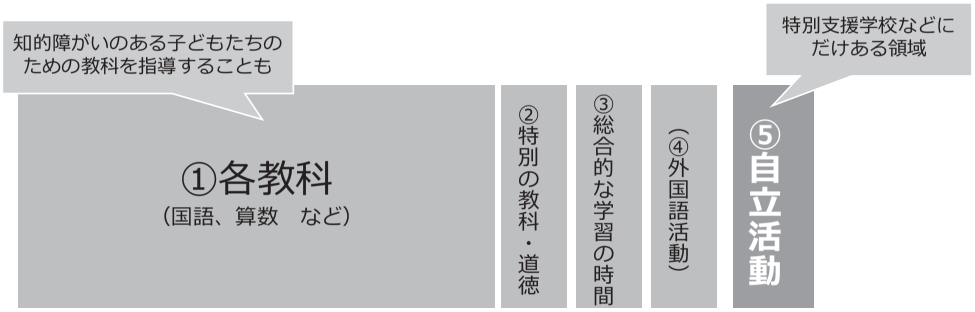
「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」（文部科学省）平成　年を改変

障がいのある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた カリキュラム・マネジメントの推進



「特別支援教育教育課程研究協議会資料」（文部科学省）令和３年を一部改変

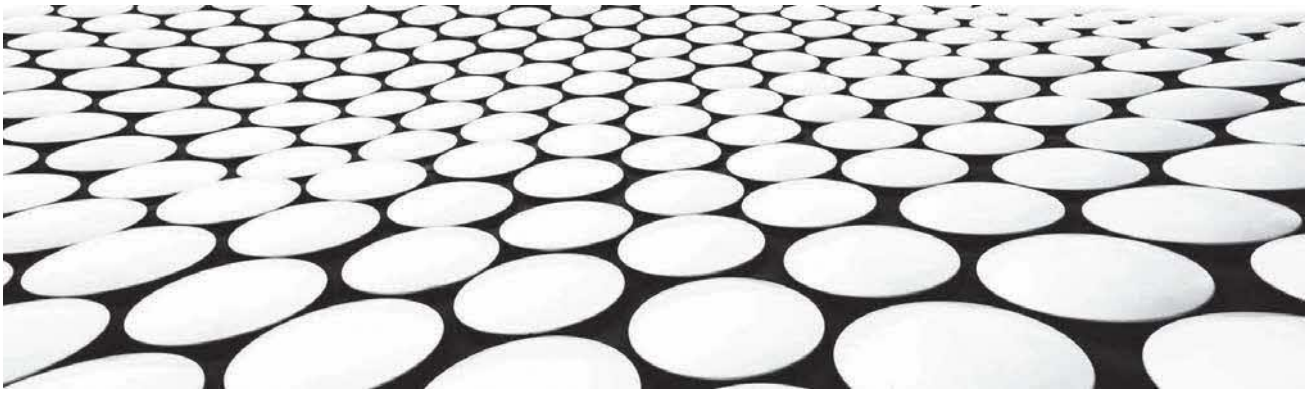
特別支援学校・特別支援学級の教育課程（小学校・小学部の例）



小学校と特別支援学校・特別支援学級で異なる点
- ○　「自立活動」の指導があること。
- ○　知的障がいがある場合
  - ・授業の総時数は同じだけど、各教科の時数は決まっていない
  - ・「学年」ではなく、「段階」別に目標や内容が示されている
  - ・各教科等を合わせて指導することができる「生活単元学習」「作業学習」など

令和3年度共に学び、生きる共生社会コンファレンスIN 北海道

第５分科会　学生サミット発表



発表の流れ

オンライン講演会・実地体験等

２か月間の学びを振りかえり共有

アクション宣言の中身・決定過程から

学生チームが見出した論点を整理する

学びの軌跡 | **アクション宣言** | **宣言に込めた想い**

学生チームによる

共生社会実現に向けたアクション宣言

学生サミット　学びの軌跡

10/29 第1回打ち合わせ
11/12 学生同士の顔合わせ①
11/30 学生同士の顔合わせ②
12/5　ｲﾍﾞﾝﾄ参加①(ﾈｳﾎﾞﾗｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ)
12/14 お話し会①(医療法人稲生会理事長・土畠先生)
12/17 お話し会②(衆議院議員・荒井ゆたか氏)
12/20 お話し会③(ｲｷﾞﾘｽ在住の友達国際交流)
12/26 ｲﾍﾞﾝﾄ参加②(ﾌﾞﾗｲﾝﾄﾞｻｯｶｰ体験)
12/26 ｺｱﾒﾝﾊﾞｰMTG
1/4　ｲﾍﾞﾝﾄ参加③(とんとこクッキング@医療法人稲生会)
1/9　ｲﾍﾞﾝﾄ参加④(重度障害当事者の方のお宅訪問・餅つき)
1/13　お話し会④(LGBTQ当事者の方のお話会)
1/16　お話し会⑤(とんとこｸｯｷﾝｸﾞの振り返り)
1/29　ｲﾍﾞﾝﾄ参加⑤(写真展)

2022/2/10

お話会（参加者アンケートを基に）

医療法人稲生会理事長・土畠先生

「共生社会の答えがまだ見つかっていないということがわかった。」

「共生とは考え続けるもので、状況により解釈が違うのだからその人ごとに考えさせる場を提供することで止まっておいた方が良い（＝自分なりなり共生社会の答えを教えることはしない）ので
は？と解釈できた。」

「共生社会という言葉は、もしかしたら実態なき概念で、そこについて考え続ける態度こそが求められている答えなのではないかと感じた。」

「障害は共生社会の氷山の一角に過ぎないのであって、今も新たな多様性が誕生している以上は、その都度考え、自らと異なる文化や現実と共存する一般的な能力を磨くのが必要と感じた。」

2022/2/10

衆議院議員・荒井ゆたか氏

「カナダに生まれ、小5から田舎で育った私は幼い頃は皆んなに勉強に追いつくために頑張っていた。基礎的な勉強が追いついたあとでも、ずっと偏差値50は超えなければいけないと思っていた。お話を聞いて教育の現場で半分より下の子供たちがそれでも自分の価値や自分は素晴らしいと思えるようにすることが大事ということをおっしゃっていた。もちろん勉強して学びを広げることは素晴らしい。それでも偏差値50以上、偏差値高いという価値観の押し付けは決して共生ではないと思う。」

「実際に実力をもって国政に携わる方を仲間にして運動を起こしたり、自分の意見を広げたりすることは非常に大切だと思ったし、特に実現可能性という点においては、絶対に政治分野への働きかけは必要であると感じた。」

「共生、というよりも教育についての学びが深い会だった。 フィンランドについてのお話があったように、 他国はどういう教育があるのか、共生社会に向けての取り組みはどんなことがあるのかを調査するのもヒントが得られると考えた。」

2022/2/10

LGBT当事者の方

「共生社会アンチの人達の意見も肯定しないと、真の共生社会は実現できないのだとハッとした→真の共生は強制しないことだと解釈した」

「誰かにバレてしまったらという恐怖を感じたことは自分はなかったが、今よりもシビアな時代だときっと生きづらい世の中だったのだと思った。変えていかなければならないのは僕たちで、それは自分が認めるかではなく相手を尊重することができるか。迷惑をかけていないことに対して声を上げての否定は違うんじゃないかなと思った。」

「学校では、周りの人間、関わる人間を選べない(同調圧力)」

「結婚のことを考えるフェーズの中で好きであるのに結ばれない。家を借りる時も法律の面で当たり前のサービスを受けれない当事者たちのお話を聞いてすごく生きづらさはあると感じた。人をなんでも型に当てはめなくて良いと思う。」

2022/2/10

実地体験（参加者アンケートを基に）

重度障害当事者の方のお宅訪問（餅つき）

「障害者と健常者というバリアを壊すには、バリアを意識しないことが重要だと思った。もちつきという関係ないものを利用することで、自然とバリアがなくなっている状況を作り出せるのではないかと気づいた」

「障害の有無とは全く関係のない家族の温かみを強く感じた。障害とか、できるできないとか関係なく1人の人間として、愛する家族として大切な存在なのだと感じた。」

「障害当事者に何かしてあげるだけではなく、その家族に対してのケアも大事なのではないかとも考えた。ご家族に喜んでもらえたことも非常にうれしかった。」

2022/2/10

とんとこクッキング@医療法人稲生会

「太鼓の音や振動は、障害者健常者関係なく心揺さぶられるものなので、そういった共通のものを通せば、両者の壁みたいなものは薄まるなと体感しました。」

「久々の太鼓チャレンジ＆どんぐりっこたちとの再会だった。まず太鼓は、コミュニケーションは言語だけではないのだと改めて感じさせられた。動き、声、表情などすべてを使って感情表現をしてくれる子供たちと過ごすうちに、受け取る側の感受性も豊かになっていくのを感じた。また、大人が楽しそうに運営・参加するイベントは、子供たちにもその楽しさが伝染するという、登山企画の時以来の同じ学びを得た。」

「オンライン参加の子たちの画面では保護者の方も一緒に叩いていて、親子ともに笑顔を見ることができた。私たちは社会で生きていく中で劣等感を感じたりできないことを嘆いたりすることがあるが、みんなが笑顔で過ごすことができればそれだけでいいのではないかと思った。」

「初めて重度障害の小さな子どもに会った。 自分の中で、どんな子どもでもかわいいなという気持ちが変わらずあることがわかった。」

2022/2/10

ロンドン在住の方（国際交流）

「ヨーロッパの文化の進み方や多様性がすごいと感じた。日本と同じ島国ではあるが、文化を受け入れる姿勢等を見習うべきだと思ったし、海外の人にはもっとお話を聞きたいと思った。」

「ロンドンでもホームレス、貧富の差が大きい問題が印象的だった。歴史的な建物のバリアフリー化は歴史の保全との掛け合いがあるというのは日本とも似ているらしい…。文化、伝統と現代の問題との折り合いをどうつけるか気になった。」

2022/2/10

アクション宣言

①共生社会とは何か

- 答えは出ませんでした

→多様性に際限なし（今この瞬間も新たな多様性が誕生）

２か月間の学びで触れた多様性は氷山の一角

共生社会を考え続けるスタート地点に立ったに過ぎない

2022/2/10

②僕たちのアクション宣言

Ⅰ　学び・考え・触れ続ける

Ⅱ　いつの間にか学べる場を作る

2022/2/10

Ⅰ　学び・考え・触れ続ける

・際限ない多様性に対するたったひとつの対処法「継続すること」

・氷山の一角を知っただけで、共生社会は実現しない

・様々な多様性を学び・考え・触れ続けることで、新たな多様性を受け入れる作法を学ぶ

・Z世代は特に、「触れること」が重要
→誰が見たのか、本当に見たのかわからない情報が氾濫

新たな多様性に出会ったら
こうしたらいいんだ！

Ⅱ　いつの間にか学べる場を作る

「稲生会の１室乗っ取り計画」

2022/2/10

稲生会の１室乗っ取り計画とは

・稲生会には使えそうな空室が・・・（おもちゃの部屋など）

・その１室を使って学生の学び継続の場を創出（サークル）

・誰でも集まれる憩いの場を提供する（学び＋楽しみ）

・日によって来訪者が変わる場

「いつの間にか学ぶ」

幼稚園で初めにした勉強を覚えていますか？

挨拶、手洗い、順番待ち、譲り合い・・・

挨拶　→　おはようございますの歌・踊り
手洗い　→　手洗いうがいの歌・踊り
順番待ち→　おまけのおまけの汽車ポッポの歌
食育　→　大根抜きゲーム・焼き芋大会

手洗いとか食育とか興味ないけど
歌やゲームは楽しい！

この時、歌ったり、踊ったり、楽しいゲームをしているうちに
「いつの間にか学んでいた」ことに気づきますよね？

2022/

（例）とある医療イベントの場合

目的「たくさんの人に医療に興味を持ってもらうこと」

矛盾発生

内容「医療的に優秀な医者による医療プレゼン」

集まるのは、医療に興味がない新規ターゲット＜元々医療に興味のある旧ターゲット

医療に興味がない人は、そもそも医療系のイベントなんか来ない

医療系のイベントは、元々医療に興味があった人の意識を強化するため、そもそも興味がない人との格差はもはや拡大して悪化

食育に興味のない幼稚園児に、食育を真面目に語っているのと同じ2022/2/10

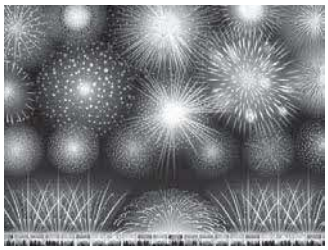
興味のない人やアンチを仲間にできる学び方

・テーマを前面に押し出さない
→出せば出すほど新規参加者にとって「つまらなそう」な情報

・テーマ抜きでの魅力
→「医療系のイベント」に甘えて他の内容をさぼっていないか。それ抜きでもちゃんと魅力的？

・実体験で学べる「非言語的学習」
→理屈抜きで感じる魅力を作り出せているか？「ルールを聞くより遊びたい」に答える。

いつの間にか学ぶ「空間」の創出



終わりに

・学生が提供できる学び、大人が提供できる学び
→体を張る学び、経験が要求される学び、人脈・財力が必要な学び・・・

・見える、見えないの差があるだけで、万人が困難を共有
→人によって挑戦の内容は変わる。自分にとっての挑戦を忘れずに。

・新たな仲間を増やし、そして学び、考え続けること
→まだ見ぬ多様性に備えること、未来の共生社会へ

ブレイクアウトセッションへの導入

・学びは理論先行？アクション先行？

・大人が提供できる学び、学生が提供できる学びってなんだろう？

・既存のイベントの良い点・改善点は？

END

今回、活動に当たってお話をきかせてくださった皆様、実地体験の提供をしてくださった皆様に心より感謝いたします。

学生チーム一同

2022/2/10